

ポーランドにおける夏目漱石研究

アダム・ミツキェヴィチ大学東洋学科
津田モニカ

2003年に私は、文部科学省からの奨学金で東京工業大学での留学が可能となり、やがて博士号を取得した。博士論文は、東京工業大学の井口時男教授と東京大学の小森陽一教授の指導の下、「夏目漱石の小説に見る女性像」をテーマに書いた。日本留学までは、ワルシャワ大学日本学科で夏目漱石の生涯、伝記、作品を研究していた。恐らくは私自身が女性であるという理由から、漱石の時代の女性達の社会的な問題に興味を持つようになり、漱石の作品にそれらがどのように描かれているかを分析したかったのである。しかし、様々な問題を研究していく中で気づいたのは、漱石の作品の背景を成す明治という時代について、私の知識や認識が不足しているということだった。そのため、日本留学から帰ってきて以来、漱石の小説のポーランド語訳シリーズに着手し、歴史的・社会的背景の研究を続けてきた。そうした研究の成果は、シリーズの責任編集者として各翻訳作品に付した「まえがき」という形で実を結んでいる。これまでシリーズとして、『吾輩は猫である』が2006年に、そして『坊っちゃん』が2009年に出版された。

このセミナーでは、『吾輩は猫である』と『坊っちゃん』の「まえがき」として書いたものを紹介しつつ、これらの小説がポーランドでどのように受容されているかについて報告したい。また、それを通して、漱石の作品が現在のポーランドにとって持つアクチュアリティについても語りたいと思う。

『吾輩は猫である』はポーランド語で“*Jestem kotem*”と言う。この作品が初めてポーランド語で出版されたのは、1977年のことである。訳者はミコワイ・メラノヴィチ教授で、本文の後に、訳者が自ら「あとがき」を書いている。

漱石の『吾輩は猫である』が発表されたのは、1905年のことだが、私たちは、そのちょうど100年後に当たる2005年に、メラノヴィチ教授の翻訳に修正を加えつつ、再出版することができた。そしてその際、この本を夏目漱石のポーランド語訳シリーズの最初の一冊とすることを考えた。そこで、シリーズ全体の編集や校正をするために、文学を専門とする私だけではなく、歴史を専門とするカネルト博士や、言語学を専門とするヤブウォンスキ博士といった同僚達とともに、シリーズの編集委員会を立ち上げた。ポーランド語の初版が出た1977年からは、もうかなりの年月が経っており、漱石の名前もほとんど知られていなかったため、2005年に私たちが『吾輩は猫である』を改訳、再出版したときには、この作品がいまだにアクチュアルだということ、今読んでも十分に面白いということ、今でも読む価値があるということが読者に伝わるようにすることを、何よりも念頭に置いていた。

そのため、漱石という作家をポーランド人に改めてどのように紹介するかが重要となり、本の装丁も大きな位置を占めると考えた。シリーズを表すロゴを決め、出版社のグラフィックデザイナーに漱石の写真から作ってもらった。また、最近のポーランドでは、漫画やアニメやコンピューターゲームの影響で、大変な日本ブームとなっているが、このブームの波に乗ることも意識した。

本の最初の部分で、日本語の人名や地名をアルファベット表記する際の翻字規則を説明した。また、巻末には語彙集を付して、作品に登場する日本語の事物について説明を載せた。そして、「あとがき」ではなく「まえがき」として、読者の興味を掻き立てるために、ごくわずかだが、漱石という作家の偉大さ、彼の作品の面白さについて書いた。

まず、漱石という作家の偉大さを読者に知ってもらうために、ポーランドではほとんど知られていないが、日本では千円札の肖像になっていることを書いた。また、漱石の人間としての一面を紹介するために、ロンドン留学の後、神経を病んだ漱石が、治療の一端として何か書いてみないかと親友に勧められたことから、小説を書くようになり、その最初の作品が『吾輩は猫である』だったというエピソードも紹介した。そして「まえがき」の最後には、『吾輩は猫である』の書かれた **1905** 年当時の日本は、西洋文明に対して国を開き、近代化を目指して走っていたという時代背景の説明をしたが、それはちょうど **1989** 年以降、西ヨーロッパに対して国を開き、懸命に近代化しようとしている現在のポーランドとも重なるものである。また、これは以前ある学者が話していたことだが、当時は日露戦争の最中だったため、新聞には連日、戦死者の名前が載っていたのだが、ちょうど小説の語り手の猫に名前がないように、それまで無名だった作家漱石が、この作品によって有名になり、戦死者のように永遠にその名前を刻まれることになったということも書き添えた。

本の装丁についても説明すると、デザインしてくれたのは、日本の有名なイラストレーター日向山寿十郎氏である。日向山氏は、明治と現代を結ぶようなデザインにしたいとの思いから、また、装丁が本にとって衣服のようなものだという考えから、明治以降の実際の着物の柄を使って本の装丁をデザインしてくれた。さらに、日本の伝統文化の一つである「切り絵」を表紙中央に配してくれたのだが、ポーランド人には、それが「切り絵」であることも、また日本の伝統文化であることも分からないどころか、むしろ逆に、多くの人にとって漫画のコマのように見え、却って新しいデザインとして映るのが面白いところである。

ここで少し、日向山寿十郎氏について紹介すると、日向山氏は **1947** 年に鹿児島県で生まれ、現在、都内を中心にイラストレーターとして活躍しつつ、また個展も開いている。子供のための絵、童画を多く描いている一方で、近年は特に女性の内面的な美しさを追求した作品、いわゆる「美人画」で有名な作家でもある。

せっかく新しいシリーズが出るのだから、私はこの『吾輩は猫である』を、まずは日本学科の学生達に知ってもらい、好きになってもらいたいと考えた。学生達に『吾輩は猫である』が出版されることを話したところ、この小説の映画は存在するのかという話になり、市川崑監督の映画があることを聞いた一人の学生が、私たちの直した新しいメラノヴィチ訳を使って、その映画に字幕を付けてはどうかと提案した。その学生は友人三人の力を借りて、字幕のCDを作った。私も学生達に応え、市川監督の『吾輩は猫である』が手元になかったため、日本から取り寄せることにした。ところが、映画には二つのバージョンがあり、一つは国際交流基金が、もう一つは映画会社が持っていることが分かった。国際交流基金のバージョンは英語字幕が付いたもので、したがってポーランド語の字幕を新たに付けることができないため、映画会社が所有する無字幕のバージョンを、日本大使館を通して注文した。しかし、大使館が手配してくれたのは、どういうわけか国際交流基金のバージョンだった。私たちは驚いたが、既に付いている字幕を切ったり、新たに別の字幕を付けたりすることはできなかつたため、日本のかつての伝統のように、弁士が字幕のテキストを読み上げるという形で上映することにした。ちょうど私のゼミに一人、日本映画について修士論文を書いていた学生がいたのだが、彼が日本映画の歴史について、映画の上映前に15分間ほどの短い紹介をしてはどうかというアイデアを出したところ、皆が賛成した。また、私も夏目漱石の専門家として、何か漱石について話してほしいと学生達に頼まれ、それならば、いっそのこと、漱石についてのシンポジウムを作ろうという考えが私の中で生まれた。上司に相談すると、それならば、いっそのこと、国際シンポジウムにしようということになった。そして、夏目漱石について語るのであれば、漱石の孫である、オレゴン大学教授の松岡陽子マックレイン先生にも話してもらおうのいいということになった。また、『吾輩は猫である』を初めてポーランド語に翻訳したメラノヴィチ教授も、学生の間では伝説の大先生となっており、彼らの期待に応えるためにも、呼ぼうということになった。さらに、シリーズの編集委員会のメンバーも、私は漱石文学の専門家として、カネルト博士は歴史の専門家として、ヤブウォンスキ博士は言語学の専門家として、それぞれ『吾輩は猫である』について発表することにした。学生の一人が松岡先生の講演を通訳したいと申し出てくれた。こうして私たちは、夏目漱石シンポジウムのプログラムを決めた。まったく嘘のような話だが、本当に実現したのである。

アダム・ミツケヴィチ大学の学長がシンポジウムの開会を宣言してくれ、東洋学科長のマイェヴィチ教授も一言あいさつを述べてくれた。皆が楽しくシンポジウムに参加することができたが、中でも最も面白かったのは、やはり映画の上映会だった。ポーランド人の観客は、自国語での弁士の語りを聞きながら見ることによって、遠い、古い日本の映画ではなく、とても親しい、新しい映画を見ているように楽しむことができたと思う。このシンポジウムの成果として、皆の発表が雑誌「*Silva Iaponicarum*」第7号（2006年春号）にまとめられ、出版された。

また、漱石の孫である松岡先生がポーランドに来てくれる又とない機会だということで、シンポジウムの枠とは別に、**2005年12月10日**にも、アダム・ミツケヴィチ大学日本学科の学生達のために特別講演をしてもらった。松岡先生は、**12月12日**にはクラクフ市の日本美術・技術センター「Manggha」からも講演を頼まれ、私が通訳として同行した。松岡先生は「孫娘から見た漱石」について話したが、『吾輩は猫である』の映画の反響が良かったことから、先生の講演の後で、映画が上映された。しかし、このときは弁士がおらず、観客は英語字幕のものを見ただけだったので、ポズナン市の観客ほどには楽しめなかったようだ。私たち二人は、その後、日本大使館の招待を受け、クラクフ市からワルシャワへと向かった。松岡先生はそこで「漱石、そして鏡子夫人について」という講演をし、私がその通訳をした。このときは、『吾輩は猫である』の映画の上映もなく、また『吾輩は猫である』のポーランド語訳の再出版についても何も触れられず、ただ松岡先生を中心とした講演会となった。しかし、せつかくの松岡先生のポーランド訪問を何らかの形で残したいと、アダム・ミツケヴィチ大学として、先生のすべての講演を「**Silva Iaponicarum**」第9号（**2006年秋号**）にまとめて出版し、その中で私も松岡先生について短い伝記を書いた。

後で知ったことだが、このときのポーランド訪問は、松岡先生にとっても忘れ難い体験となったようで、非常な刺激を受けて、先生は**2007年**に「漱石夫妻 愛のかたち」という本を朝日新聞社から出版し、その序文の中で、このときの体験について書いてくれている。

こうして、アダム・ミツケヴィチ大学の日本学科の学生達は、積極的にシンポジウムに参加し、漱石の面白さを味わうことができた。翌**2006年**には、学生達から『吾輩は猫である』を「日本近代文学演習」の課題として取り上げるように頼んできた。授業では、『吾輩は猫である』のユーモアと女性像という二点を中心に取り上げた。また**2007年**には、ポズナン外国語大学でも、日本学科の学生達に日本文学を教えるように頼まれたことから、そこでも『吾輩は猫である』を演習の時間に扱った。若い人達が**19世紀**の文学、明治の文学を読まなくなっている昨今だが、こうして学生達が楽しそうに、喜んでこの作品を読んでいるのを見ると、漱石のポーランド語訳シリーズは成功だと思えるようになった。

漱石のポーランド語訳シリーズの第二作として、『坊っちゃん』を出版した。この作品は、今回初めてポーランド語で出版された。訳者は、ヤギェウォ大学日本学科卒のボジェナ村上氏である。編集委員会のメンバーは、今回も同じく、私と私の同僚カネルト博士、ヤブウォンスキ博士である。本の構成は、『吾輩は猫である』の場合と同じく、まず、日本語の人名や地名をアルファベットに翻字する際の規則が説明されている。ただし、『吾輩は猫である』との違いは、アルファベット表記の例が『坊っちゃん』の作品中に実際に登場する名前から採られているということである。また、『坊っちゃん』の中に登場する

日本語の事物については、やはり『吾輩は猫である』の場合と同じく、巻末に語彙集としてまとめられ、説明されている。そして、この本にも「まえがき」が付されている。

この「まえがき」で、私は、夏目漱石についての説明というよりも、『坊っちゃん』入門のようなものを書くことを目指した。例えば、この作品は漱石の松山時代の英語教師としての経験から生まれたこと、ゆえに、主な舞台は学校であることを書いた。また、漱石の親友、正岡子規が松山出身であることから、坊っちゃんと山嵐の友情は、漱石と子規の友情を反映しているのではないかということも書いた。また、漱石が松山に住んでいた時に中根鏡子との縁談が舞い込んできたことに触れ、『坊っちゃん』の中には、マドンナとの恋愛および結婚というプロットも見られることを述べた。さらに、この作品は基本的に青春小説として読まれているが、舞台が学校であることから、当時の日本の教育制度についても少し説明した。そして最後に、江戸っ子についても説明した。ちょうど本の表紙に竹が描かれているが、竹を割ったような、直情的な坊っちゃんの性格は、江戸っ子に典型的な気質であることを書いた。また、江戸っ子のもう一つの特徴として、非常に早口であることが挙げられるが、坊っちゃんの語り口はまさしく江戸っ子のものであることも書いた。同時に『坊っちゃん』に見られる言語についても、少し説明した。というのは、『坊っちゃん』には方言が多く登場するが、それらはポーランド語に翻訳しようがないからである。そして、漱石がそうした方法を採用したのは、文語よりも口語に近い、しかも落語の様式に近い作品を書こうとしたためだということも書いた。また、それは一種の言文一致の試みとも言えることから、当時の日本の文壇における言文一致運動についても触れた。時代背景としては、作品の中にも描かれているように、当時の日本が戦争と教育を使って、アジアの筆頭になろうとしていたこと、そして欧米の列強と肩を並べる一等国になろうとしていたことを書いた。例えば、作品の中で日露戦争の祝勝会が行われていること、また、坊っちゃんが学校に宿直するのは当時各学校に配られていた天皇の肖像を守るという役割もあったこと、そして、このように日本の中央の政策と松山という地方の現実との間にはギャップが見られることについても触れた。

この本の装丁も、日向山寿十郎氏がデザインしてくれた。表紙に使われている着物の柄は、上にも述べたが、竹の柄である。切り絵のアイデアとしては、当初、団子を食べている坊っちゃんというものだったが、日向山氏は美人画の専門家であることから、結局、桃色の服を着たマドンナの切り絵になった。昼間のマドンナではなく、月明かりの下のマドンナであるため、着物だけでなくリボンも同じ桃色で表現されている。

2009年から2010年にかけて、「日本の文明」という授業の中で『坊っちゃん』を取り上げた。これはアダム・ミツケヴィチ大学の三年生の授業だったが、ジェンダー理論を用いて『坊っちゃん』を読んだ。学期末に学生達にレポートを書かせたところ、非常に面白いレポートを書いてきたので、ここで少し紹介したい。

レポートで課したテーマの一つは、「働く女性」というものだった。学生達は、とくに下女、あるいは女中の仕事に注目した。その中で、同じ下女と言っても、清と山城屋の女中達とは随分違うという意見が出た。というのも、山城屋の女中達は、例えば、高いチップを取ったり、部屋がないと嘘を吐いたり、坊っちゃんの靴を磨かなかったり、サービス業に携わる者として非常に悪い人物として描かれていると、学生達は指摘した。彼女達に比べると、清は坊っちゃんにとって母親のような役割を果たしている。そして基本的に、母親が自分の子供に対して持っているような特質、例えば、支え、逃げ場所、ぬくもり、理解などを、清は坊っちゃんに対して持っているというのである。また、別の学生達は、清の社会的に厳しい状況にも注目した。清は、理想的な妻になれるにもかかわらず、あくまで男性に従属しており、自由がないというのである。もう一つ、清についての面白い指摘は、清が坊っちゃんに対して主従の関係を保っている、と坊っちゃんが思っているために、坊っちゃんは女性である清を恐れていないというものである。つまり、清は坊っちゃんにとって、女性というより母親であるため、怖がる必要がないというのである。坊っちゃんとはときどき清を軽視したような発言をし、萩野の婆さんにも同じような発言をしているが、萩野の婆さんに対する場合は、ジェンダー的に軽視しているというよりも、中央からきた坊っちゃんが地方の人間すべてに対して、一種の軽蔑をもって接しているからであり、むしろ「中心・周辺」という価値観に基づくものだと言える。また、これもジェンダー理論ではないが、清がユングの太母の元型として描かれているという意見もあった。というのも、清は坊っちゃんに安心感、保護、信頼を与えているだけでなく、一緒に墓に入りたいという清の言葉は、清と坊っちゃんの間には死よりも強い共生関係があることを示しているというのである。さらに別の意見としては、作品の中に見られる女性らしさと男性らしさの対立に、陰陽思想の影響が見られるというのもあった。最も滑稽な意見としては、下女の清が貯金をしているのにも関わらず、つまりせっかく金を持っているのに、どうして休暇にどこへも出かけないのか、というのがあった。マドンナについても、同じように滑稽な意見が出た。それは、マドンナが古賀と婚約していながら、赤シャツとよく会っており、しかも古賀との婚約を解消しないのは、たとえ他人からどんなに悪く言われても、一度交わした約束は必ず守る性格だからだ、というものである。

こうした意見を読むと、学生達が本当に楽しみながら、この作品を読んでいたことがよく分かる。それは、教師として非常に嬉しいことであるが、同時に、明治の女性達が置かれていた不自由な立場、金銭的に困難な状況、社会的に低い地位について、十分に教えられなかったのではないかと、という思いも残る。そして、さらには、日本文化の特質が果たして正しく理解されているのか、という不安を持つこともある。例えば、学生の一人が、古賀はマドンナを手に入れるために戦うべきである、古賀には騎士道精神が足りない、という意見を出したが、もちろん、それはヨーロッパ中心主義的な価値観であり、日本学科の学生としては、あまり相応しくない、あるいは理解が足りない意見であろう。

マドンナについて、他の意見も紹介したい。

マドンナは人間として主体性を奪われており、男性達によって格付けられ、町中でどんなに噂されていても、自分で自分を守ることができないという意見があった。もちろん、他の女性達によっても彼女は噂されているが、彼女に関する最終的な決断は男性達がとる。概して『坊っちゃん』では、女性がステレオタイプ化されているが、それはあくまで男性の目から見ての評価である。例えば、いか銀の奥さんは「ウィッチ」と呼ばれている。マドンナも男性達から批評されており、彼女は女性として男性に従属しており、未婚の娘として父親に従属しており、彼女が結婚するかどうか、また誰とするかは父親によって決定されることを、学生達は指摘した。男子学生の一人は誤解して、マドンナがあたかも主体性を与えられているかのように、古賀に飽きたので赤シャツに興味を持ち、口説かれてもいいように振舞っているという意見を出した。しかし、これは男子学生の意見で、女子学生のほとんどは、結婚が適当な月収と社会的な地位に基づいた制度であることに気づいていた。そして、女性が個人としてではなく、例えば、母親、妻、芸者、あるいは嫁に出される娘といった役割として描かれていることにも、女子学生達は気づいていた。こうした役割は、すべて男性のためのものであり、男性中心主義的なものに過ぎないというのである。また、マドンナの心変わりや芸者達の愛想の良さは、赤シャツの社会的な地位に対する褒賞であり、彼の金力と結びついているという意見もあった。一方、マドンナや他の若い女性達は、男性を精神的に落ち着かない状態に陥れるが、年上の女性達は、その振舞いが予測可能なことから、男性に安らぎを与える。それに対して芸者達は、たとえ年が若くても、男性に仕える女性として、年配の女性と同じような安らぎを男性に与えていることに気づいた学生もいた。つまり、ここで二種類のタイプの女性が見られるというのである。すなわち、男性が安らげる家庭的な女性と、男性にとって関心の対象としての女性である。例えば、赤シャツは、マドンナを島に置きたいと話しており、彼女を飾り物として扱っている。

他にも、学生達のレポートには、小説の中で男性が女性に例えられる場合が多くあることが指摘されていた。もちろん学生達は、それが否定的な意味で例えられていることに気づいていた。例えば、坊っちゃんは自分の兄について「元来女のような性分で、ずるい」と批判しており、赤シャツについても「妙に女のような優しい声を出す人だ」とか「弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう」と批判している。小説の中で、古賀は「紳士」のように描かれているが、学生の一人は、この古賀こそ「女々しい」と批判した。赤シャツについては、さらに、「御殿女中の生まれ変わりか何か」だから「弱虫」で「人を烟に捲く」とか「どこまでも人を胡魔化す」といった批判も見られる。しかし、ここで学生達は、江戸時代の宮中や大奥の女性達にとって、当時も男性中心的社会だったことから、生き残るために「人を烟に捲」いたり、「人を胡魔化」したり、様々な策略や計算が必要だったのだというところまで掘り下げようとはしなかった。同じように、『坊っちゃん』の中で男性達が「マドンナ」についてあれこれと伝説を作っているが、学生達はこれについても、「マドンナ」という言葉が西洋で美しい女性を

表す代名詞として機能していることから、作品に登場する「鬼神のお松」や「姉妃のお百」といった伝説と結び付けはしたものの、しかし、それらがそれぞれ、どういう伝説なのかという所までは、探らなかった。したがって、例えば、坊っちゃんが赤シャツについて「女のような親切もの」と批判するとき、単に女性が悪いものとして連想されているということだけでなく、どうして女性がそのように「親切」でなければならなかったのかということも、日本学科の学生としては考えて欲しかったというのが私の思いである。もちろん、レポートに見られた指摘の通り、『坊っちゃん』では女性達がすべて後景に描かれており、表面的には重視されていないにも関わらず、女性達についてのテキストは多くあるということに、学生達が気づいたのは、とても良かったと言えよう。

他にも面白かったのは、坊っちゃんがADHD（注意欠陥・多動性障害）かどうかを論じたレポートで、坊っちゃんの詳しい行動分析に基づいて、もし坊っちゃんが現代の社会に生きていれば、ADHDという診断をもらった可能性が高いだろうと結論するものだった。現代心理学理論を用いたレポートで、もう一つ面白かったのは、家庭内関係を通して見た坊っちゃんという人物についてであった。とくに、坊っちゃんが自分は兄と違って、両親から受け入れられていない、排除されている、ネグレクトされていると感じており、精神的暴力を振るわれているというのである。また、フェミニズム理論が論じる母親の欠如から、松山赴任中における清の欠如について見事に指摘した学生もいた。私としては、この小説が現代の文学理論を用いて読まれ、学生達にとっても十分アクチュアルな意味を持っていることが分かり、とても嬉しく思っている。

最後に一つ、滑稽だったのは、『坊っちゃん』の中に、女性の金銭に対する態度について「なるほど女と云うものは細かいものだ」という一文があり、これは普通皮肉として読まれているが、これをそのまま文字通りに、つまり女性の肯定的な性質として受け取った学生がいたことである。すなわち、節約上手、やりくり上手として肯定的に理解したわけである。というのも、これはポズナン市民の気質と言われているのだが、非常に節約上手で、金銭に厳密で、しかもそれを一種の誇りのように見なしているのである。確かに、ポズナン市民がそうした性格を持っていることは事実であり、また、漱石を現代の視点から、つまり私たちの「今ここ」から読むことはとても大切であるが、ただローカルな基準にもとづいて、しかもそれを相対化せずに、あるいは意識せずに読んでしまうと、間違いも犯しやすいことが分かった。

以上が、アダム・ミツケヴィチ大学の三年生のレポートについての報告である。

同じ2009年から2010年にかけて、アダム・ミツケヴィチ大学の一年生の「文学理論」の授業の中でも、やはりフェミニズム理論を使って『坊っちゃん』を読み、レポートを提出させた。テーマは「女性らしさと男性らしさ」あるいは「家の中の女性と家の外の女性」というもので、どちらかを選んで書いてもらった。学生の中には、ヴォーヴォワールやジュディス・バトラーの理論を使って論じた者もいた。基本的には、上に紹介したものと似たようなレポートが提出された。

同じく2009年から2010年にかけて、ポズナン外国語大学でも、2年生の「日本文学演習」の授業の中で『坊っちゃん』を取り上げ、レポートを書かせた。テーマは「『坊っちゃん』における女性」というもので、内容的には、こちらでもほぼ似たようなレポートが書かれた。

漱石の作品をポーランド語に翻訳し、出版する中で、様々な問題に直面している。まず、シリーズの問題としては、本が商業的にそれほど売れるものではないため、出版してくれる出版社を探すのが難しいということである。幸い、これまでのところ、大きな出版社ではないが、「Inter Media」という出版社を見つけ、出版することができた。この出版社は、インターネットを通してだけでなく、書店を通して売っているが、主に、日本と関係のある書店、あるいは日本のグッズを販売している店、例えば、クラクフ市の日本美術・技術センター「Manggha」などで、売っている。この点から考えれば、私たちが今やっていることは、一般大衆向けの仕事というよりも、一部の文学通のための仕事ということになるだろう。それならば、今称賛されることよりも、100年後、150年後に評価されることを目指すべきなのだろう。もう一つの問題は、スポンサー探しである。つまり、出版のための費用を援助してくれるスポンサーを探すのが非常に困難なのだ。ポーランドには、企業が文化を資金的に援助する場合、その分が税金から控除されるという法律があるのだが、数ある文化プロジェクトの中から、とくに大きな文化イベントでもない、また特別人気があるわけでもない、漱石のポーランド語訳シリーズを、敢えて選んで援助してくれるように説得するのは、とても難しいことである。また、その際には、日本文化を紹介する上での目的の違いも、しばしば浮き彫りになることがある。例えば、漱石シリーズの場合、漱石自身がポーランドで愛されることを目指すか、あるいは日本文化の素晴らしさを伝えることを目指すか、という問いをめぐって、スポンサーとの間に誤解あるいは不一致が生じることもある。しかし、一方で、このシリーズが多くの人々によって支えられていることも事実で、例えば、松岡陽子マックレイン先生は、『吾輩は猫である』の出版を記念した漱石シンポジウムに参加する際に、「ぜひとも」と二つ返事で快諾してくれ、しかも自費でポーランドまで来てくれたのだ。私たちはとても心強く思った。

私自身の個人的な問題としては、シリーズの編集、校正から、スポンサー探し、出版社探しまで、すべてに関わっているうちに、また大学での授業の準備に追われているうちに、明治についての知識や理解を深めたり、あるいは資料を集めたりするのが、難しくなっているということがある。そうする必要を感じており、そうしたいと願っているのだが、実際には、なかなか難しいのである。